一　サンタの森

サンタの森は、地球の最も奥深い所にあった。
そこは一日に春夏秋冬がめぐる奇跡の森。その入り口には、天に届くかというほどの、巨大なもみの木があった。
そのもみの木には、あるサンタクロースの一家が住んでいた。

二　もみの木

クリスマスまであと二週間というある日の夕暮れのこと。
サンタの森は真っ赤な秋をむかえていた。森の木々は美しく紅葉し、そよ風が木の葉たちをやさしくゆらしていた。

「おとうさーん！」

家の前でソリの点検をしていたアユタがその声の方に振り返る。

「ここだよ、ここ！」

声を追ってアユタがもみの木を見あげると、もみの葉っぱの間から、子サンタがちょこんと顔を出して手を振っていた。透き通るような若草色の瞳。桜色の唇。オリーブの葉が刺繍された三角の赤いサンタ帽からは、柔らかそうな栗色の巻き毛がのぞいている。

アユタの息子で、その名はポポナ。

サンタ族の言葉で「希望」を意味する、六歳のサンタクロース。

「今日はまたずいぶん高くまでのぼったなあ」

アユタは手をとめ、立ちあがってポポナを見あげた。

「うん。さいこうきろくさ」ポポナが得意そうに言う。

「でも、まだまだだよ。きょうはぜーったいにあの枝までのぼるって、きめてるんだ！」
さらに上の枝を指さすポポナ。その時、裏庭から大きな声がした。
「こらぁ、ポポナぁ！」
声の主は、ポポナの母親、セオナ。
ポポナは「しまった」という顔をすると、もみの木の葉の後ろに姿を隠した。
「遊ぶのはお手伝いがおわってからって言ったでしょう」
セオナは表に走り出てくると、片手を空にかかげ、もみの木に向かって叫んだ。
その手には、分厚いプレゼントリストが握られている。
「今日中にプレゼントを百個包みなさいって言ったのに、たったの三つしか包んでないし、贈り物にするはずのおもちゃで遊び放題、おかげで倉庫は散らかり放題」
アユタは笑いをこらえながら、ソリの手入れにもどった。
「それに！」セオナはもみの木の下に歩み寄ると、両手を腰にあて、下から枝を見あげた。
「危ないから、それ以上高くのぼっちゃダメだって、昨日もお母さん、言ったわよね。何度言わせるの。今すぐ、おりてきなさーい」

もみの木からは無言の返事。
「隠れたってムダ。赤いパンツがここから丸見えよ！」
ポポナはしかたなさそうに顔をつき出して下を見た。
「ごめんなさい。あとでちゃんと九十七こ、つつむから。おかたづけもする。でも、ここからはおりない」
セオナを見つめて、首を大きく横に振るポポナ。
「ポポナぁ！」
「だって、じぶんがいちどきめたことはさいごまでやりなさいって、いつも、お母さん、いってるじゃないか。ぼくは、きのうのよる、きめたんだ。きょうは、あのえだまでのぼるって。だからのぼるまでぜったいにおりない」
そう言って、ポポナは上へ上へとのぼりはじめた。セオナが肩で息をつくと、アユタが笑い出し、
「きみの負けだよ」とセオナを見て目を細めた。
「ポポナはだれかさんにそっくりだ。夕日で金色に染まる美しい森を、一番高い所から見せてやりたいって、まだ小さいポポナをおぶって、どんどん上にのぼっていったのはだれだったかな。ぼくが下からとめるのも聞かずに」
セオナはバツ悪そうに視線を宙に泳がせた。
「あっ！　森のはっぱたちが、ちょっとずつ、あかからきいろにかわっていくよ。あきがおわってふゆがはじまるんだ。森がおやすみするじゅんびをはじめているよ！」
セオナはポポナの声がする方を見あげた。
「それにすごい！　ああ、きょうのゆうひはきんいろだ！　お母さんが大すきな、ピンピカピンのキンピカピンだよ！　森がきんいろにひかりはじめたよ。きれーい！　はやくお母さんものぼっておいでよ！」
アユタがセオナをのぞきこんで、「どうする？」と言うように両眉をくいとあげた。
「ヤッホー！　ヤッホー！」
森に向かって大声で叫ぶポポナの声が辺りに響いていく。
セオナは手にもったリストを数秒間じっとにらんでから、大きくため息をつき、空を仰いだ。
そしてアユタを横目で見て笑うと、その紙の束を高く宙に放り投げる。リストが葉っぱのようにゆらゆらと風に舞い、セオナは大地を蹴って空高くジャンプした。両手でもみの木の枝につかま

ると「アユタさん、あとはよろしく」と屈託なく笑った。
「ポポナ。お母さんも今いく！」
上を向いてそう叫ぶと、セオナは鉄棒選手のように枝の上でクルリと一回転した。軽やかにもみの木をのぼっていくセオナを見つめながら、アユタは愛しそうに笑い、大地に散らばったリストを、一枚一枚、ていねいに拾いあげていった。

三　生きものたちの行進

「たいへんだよー！　すごいよー！」ポポナの叫ぶ声が辺りに響く。
「どうしたのー？　夕日が森に溶け出して、今度は金色の海でもできた？」
ポポナのいる枝まであともう少しというセオナが、愉快そうに叫ぶ。
「ちがうよ！　すっごくたくさんのおきゃくさんが、こっちにむかってるの！」
「お客さん？」セオナは不思議そうにつぶやいた。
「うん、ものすごくながい、だいぎょうれつだよ」
「大行列？　いったい何の話・・・」
セオナは首をかしげて手足に力をこめた。そして一気にポポナのいる枝までのぼる。
「うちにお客さんなんか来る予定ないけど・・・」
セオナはそう言いながら、森を見おろしているポポナの隣に立った。
「でも、ほら・・・」まっすぐ前方を指さすポポナ。
セオナは目を大きくあけ、その光景に息をのんだ。
金色の光に包まれた森の道を、輝く夕日に照らされながら動物たちが行進していた。
ライオン、ゾウ、キリン、クジャク、パンダ・・・。
それは、サンタの森に今まで決して現れたことのない訪問者たちであった。ここから遠くはなれた地上に住んでいるはずの、ありとあらゆる動物たちが、列を作って、たしかにこちらに向かって歩いてくる。

その行列の中には、子連れの動物家族も見えた。

「お母さん、あれは？」

ポポナは空の向こうを指さし、セオナは手をおでこにそえて目をこらした。

森の奥へと沈みゆこうとしている大きな夕日の上に、一本の線が見えた。その線は、波を打つかのようにかすかに動いている。セオナは、ゆっくりとまばたきをした。

「鳥・・・鳥だわ。鳥たちが、羽を動かしているんだわ」

目を見ひらいてつぶやくセオナ。

無数の鳥たちの、無数の羽の動き・・・。オレンジ色に染まる空に、羽ばたきの波線が描かれる。鳥たちも手をつなぐように飛びながら、まっすぐこちらに向かっていた。

「これは、いったい」

セオナはつぶやき、ポポナは瞳を大きく見ひらいたまま母の手を握りしめた。

「大丈夫」

ポポナの手を力強く握りかえすセオナ。

「アユタさんに伝えなきゃ」

しかし木の下にはアユタの姿はなく、リストを手に倉庫の中へと入っていくその背中が見えた。

「ポポナ。お母さんの背中に乗って」

ポポナの目が輝き、セオナはうなずいた。

「おんぶ、ひさしぶり！」

枝の上でしゃがんだセオナの背中にポポナはしがみついた。

「一気におりるわよ」

セオナはポケットから糸のように細い一本のツル草を取り出した。クリスマスリストを束ねる用にポケットにしまっておいたそのツルを、ポポナの体に八の字に巻きつけて、自分の背中に固定した。

「このツルは細いけど、とっても強くて絶対に切れないの。だから安心して」

セオナはそう言うと、梢から梢へと高くジャンプしながら、風のようにもみの木をおりていった。

四　ねがい

セオナから話を聞いたアユタは、顔色をかえ、倉庫から全速力で走り出た。

ポポナとセオナもアユタの背を追いかけて表に出たが、三人とも、もみの木の前でピタリと立ち止まった。

そこには、ありとあらゆる動物たちがいた。チョウやトンボ、ハチなどもあたりを舞い、地面には、カブトムシやダンゴムシ、ミミズたちもいた。

列の先頭にいたのはゴリラ一家だった。

赤ちゃんゴリラを抱いたお母さんは、お父さんゴリラとならんで、立ちつくすアユタたち三人の前に歩をすすめ、深々とおじぎをした。

「私たちは、地上に住む生き物たちの代表です。今日は、サンタさんにおねがいがあって、こうして、みんなでまいりました。地上の国から半年の時をかけて、ともに旅してきたのです」

セオナをまっすぐ見つめるお母さんゴリラ。セオナは思わず息をのむ。

「私たちは、美しい地球を、もう一度、取り戻したいのです」

お母さんゴリラがそう言うと、お父さんゴリラはその肩をやさしく寄せながら言った。

「この地球上には、もう私たちが住める森はほとんど残っておりません。そのわずかに残る緑の中で、必死に生きている家族や仲間たちがいます。彼らは、私たちの帰りを待っています。それでもなお、生まれてくる新しい命、将来世代もいます。私たちはこのまま、何もせずに、ただ絶滅するわけにはいきません」

お父さんゴリラはアユタを見つめた。

「豊かな緑にあふれ、生命たちがよろこぶ森を、育てたいのです！」

「みんなで力をあわせて、本当のふるさとを未来に残したい！」
「汚れのない大地を、子どもたちが安心して飲める川の水を！」
まわりの動物たちが口々に叫ぶ。
「これが、ここに集った私たちの、クリスマスのねがいです」
ゴリラ夫婦がもう一度深々とおじぎをすると、それに続くように、他の動物たちも、次々と頭を下げていく。
アユタとセオナは立ちつくしたまま、ポポナの手をぎゅっと握りしめた。
ポポナは、母親の腕の中から身を乗り出し、地面に落ちそうになりながら、何度も何度も自分に向かって首を上下に振る赤ちゃんゴリラを、泣きそうな目で見つめていた。

五　なげき

「人間たちは木を伐採しつづけ、森はなくなっていきました」
低くよく通る声を探すように、ポポナは上を見あげた。声の主は、もみの木の枝にとまっていたミミズクだった。
「山々は削られ、土の道はコンクリートで覆われました。空気も汚されるばかりです。化石燃料は、人間たちの手で、瞬く間に使われています」
「かせきねんりょうって？」
ポポナがアユタを見つめ、アユタはその手のひらをポポナの頬にあてた。
「過去の生命たちが大地や海の底に眠らせてきたものだよ。土にかえった生き物たちは、何億年という長い、長い時をかけて、自然の栄養分を、その体の中にためてきたんだ。その栄養分が作り出す力で、明かりを灯したり、車を走らせたりすることもできる」
「その力を、にんげんたちは、ぜんぶ、じぶんたちでつかっちゃったの？」

枝の上のミミズクを見あげるポポナ。ミミズクは羽をわずかに広げ、下を向いた。

「全部ではありません。でも信じられないほどたくさんの量です。何億年もかけた生物の遺産を、この、たったの二百年ほどのあいだに」

ミミズクが哀しそうに目をとじるのを見て、ポポナは下を向いて唇をかんだ。

「空の色も、今はもう、青ではなくなりました。空気を透明にしてくれていた木々は切られ、植物たちも次々に枯れていくのですから当然です。私たちが昔、見あげればいつもそこにあった、あの深く美しい青い空は、どこに消えたのでしょう。水も同じです。吸い込まれるように透明だった水の色は、今では、廃水やゴミでにごりきっています」

かぼそい声でそう言ったのは、いつのまにかセオナの足もとに来ていたリスだった。弱々しくゆれた大きなしっぽがセオナの足首にふれ、セオナはしゃがんでリスの背をやさしくなでた。

六　ミリタリアエレナ

そのリスの隣に、今度は、一羽の真っ白い鳩が、空から羽を広げて下りてきた。その口には、オリーブの枝葉がくわえられており、白鳩はそれをポポナの足の前にそっとおいた。枝葉の前で、ポポナが膝を折ってしゃがむと、鳩はその透きとおる声で話し始めた。

「これは、一千年生きてきたオリーブの木の、最後の枝葉です。この木の名は、ミリタリアエレナ。この千年、幾度も死にかけては生き返ってきました。大地震がおこって大地が裂けても、津波で土砂に埋もれても、大嵐や竜巻に襲われても、雷に打たれてその身が裂けようとも、日照り続きの乾いた天地でも、そして戦場と化した大地で人間たちの銃弾に打ちぬかれても、この木は死に絶えることなく、生命の歴史を千年もの間、しずかに見守り、同時に、千年後の未来を見つめて生きぬいてきました」

ポポナは、その枯れかけた茶褐色の枝葉を見つめた。

「しかし、この守り神のような古木さえ、人間は切り倒し、その根っこもろともコンクリートで埋め固めてしまったのです。私たちの、目の前で」

鳩の目には涙がにじんでいた。

「切り倒されたその身に残っていた最後の枝葉が、これです」

再び枝葉を口にくわえると、鳩はポポナの小さな手のひらにそっとその枝葉をのせた。六つのまるい年輪が刻まれた、ツルンとした切り株のような手のひらの上に。

「息絶える前に、ミリタリアエレナは、私にこの枝葉をサンタの森に届けてほしいと言い残しました。サンタに知恵を授かり、自分たちの手で緑をつくっていく道を探すのだと。サンタはきっと助けてくれる。そして人間を恨むのではなく、人間と力をあわせて森をつくっていくのだと。それがこの世界が再び生き返る道だと言いました」

ポポナは、その枝葉をやさしく握りしめた。

「私たち鳥の仲間は、ミリタリアエレナのその最後のメッセージを、地上に残された数少ない森に住む生き物たちに空から伝えました」

ミミズクの隣には、いつのまにか、ツバメやカモメ、ツグミやワシなどの鳥たちがずらりとならんでいた。

七　動物たちの志

「あらゆる知恵をもった賢い木。地上の世界からこのサンタの森につながる『秘密の扉』の場所を教えてくれたのも、このミリタリアエレナです。そして、私たちはその扉の前に自らの意志で集結し、本当のねがいを伝えるために、ともにやってきたのです」

「あの秘密の扉からここまで。よくぞみな、無事に」

アユタは驚き、そして目をとじた。かつて青年だった自分が修行として自らの足で旅した、サンタの森から地上までの遠く荒々しい道のりを思った。

「旅の道標もまた、オリーブの木でした。私たちが迷いそうになると、必ず、そこにはオリーブの木が植えられており、進むべき方向を示してくれたのです。どんな時も私たちの心はひとつでした。大きい動物は小さい動物を支え、小さい動物もまた、大きい動物の役に立とうとがんばりました」

その時、列の一番後ろにいたライオンが、黄金のたてがみをゆらしながらゆっくりとアユタの方へ近づいてきた。お母さんライオンと子ライオンもそのあとに続くが、子ライオンは片足をかばうように歩いており、その前足の傷からは血が流れていた。それに気づいたセオナは家の中へ戻ると、一枚の薬草を手に子ライオンのもとへと走り、その葉で傷を巻いた。

お父さんライオンはアユタの前で止まると、その目を射るようにまっすぐ見つめた。

「サンタの真に恵みある知恵を、どうか我々にお授けください。生きとし生ける生命、その魂を照らすための永遠の叡智を。豊かな森をつくり、緑を取り戻すために。この星とその未来のために。我らすべての生き物の子孫、将来世代のために」

百獣の王が空を見あげる。いつのまにか夕日は沈み、空の向こうからは、四辺形を象る星座、翼の生えた天馬ペガススが、まさにその天空を翔け始めようとしていた。お父さんライオンが全身を震わせながら、上を向いてたくましい雄叫びをあげると、他の動物や虫たちも天に向かっていっせいに声をあげた。

魂の叫びが、森の夜空にこだまする。

ゴリラは胸を両手で激しくたたき、シカは辺りをはねまわった。